平成２８年度第２回高松市総合教育会議　議事録

１　日　時　平成２９年１月１２日（木）　午後３時００分～午後４時２５分

２　場　所　高松市役所１１階　１１４会議室

３　出席者　高松市長　大西　秀人
高松市教育長　藤本　泰雄
高松市教育委員（教育長職務代理者）　吉澤　潔
高松市教育委員　葛西　優子
高松市教育委員　関元　盛夫

４　事務局

（教育委員会）
教育局長　東原　利則
教育局次長総務課長事務取扱　森田　素子
教育局次長生涯学習課長事務取扱　西川　典生
学校教育課長　久保　朗
保健体育課長　平野　勝也
生涯学習センター館長　大村　武
教育局総務課長補佐　秋山　博昭
学校教育課長補佐　川野　祥靖

（市民政策局）
市民政策局長　城下　正寿
市民政策局次長政策課長事務取扱　片山　智規
生活福祉課長　坂本　博
長寿福祉課地域包括ケア推進室長　久保　典子
子育て支援課長　神前　祐史
コミュニティ推進課長補佐　藤川　盛司
文化芸術振興課長補佐　次田　吉治
文化財課長補佐　川畑　聰
政策課長補佐　松本　徳
政策課企画担当課長補佐　横山　光弘

５　傍聴人　８名

６　協議・調整事項

（１）教育をめぐる諸課題について

７　議事の経過

【開会】

【市長挨拶】

○　市　　長

・教育長、教育委員におかれましては、お忙しい中、お集まりいただき、御礼申しあげる。

・本教育会議から、本年度１０月に就任された２人の委員に参加していただく。また新しい教育委員会制度の下で、新しく教育長に就任された教育長と、また１人の委員については、本年度４月から参加していただいている。

・これまでの総合教育会議は、特定の議題を決めて議論を行ってきたが、初顔合わせということもあり、特定の議題を定めるのではなく、「教育をめぐる諸課題」についてフリートークで率直な意見交換を行ってまいりたい。

・本市の教育の方向性について、共通認識を持てたらということで、本日もよろしくお願いする。

【議題（１）教育をめぐる諸課題について】

○　委　　員

・放課後児童クラブの補助指導員と、地域の放課後子ども教室の運営をしているが、子どもたちの貧困対策について、対策や支援が必要だと感じる。

・経済状況により、塾に通えない、学習支援を受けにくい子どもに対して、生涯学習課や社会福祉協議会が行っている事業を利用したらいいと思う。

・社会福祉協議会で、中学生を対象とした学びの教室をしていると聞いたが、全てのコミュニティでできないだろうか。

○　教 育 長

・お聞きしたいのだが、医療現場にいらっしゃるお立場として、子どもの貧困を以前より生で感じられるようなことはあるか。

○　委　　員

・子どもの貧困が健康に非常に大きな影響を与えるという報告を、日本小児科学会が発表した。貧困のため、病院を受診できない、予防接種を受けられないというようなことが、思ったより大きく弊害としてあるとのことだった。
・これからは、こども食堂で、子どもに栄養をつけさせるということも必要になってくるだろう。

○　教 育 長
・子どもの身なりが整えられていない、肌着が十分に洗濯されていないといったことは、以前からあり、支援が必要な生徒については、学校で把握し、支援してきた。
・学校を訪問する機会があるが、最近は特に、一見生活に困っていないようにみえても、実際は困っているといった、見えにくい、分かりにくい貧困があるように思える。どう見極め、必要な支援を行うかが、学校の大きな問題である。
・思っているより、貧困は進んでいるのではないか。

○　市　　長
・これだけ社会全体が豊かになってきた一方で、格差というか、家庭全体の貧困率は高くなっている。
・子どもの貧困対策は行政が取り上げなければならない大きな問題の一つだ。
・本市としても学習支援等、何らかの施策、対策が必要であるが、本市としては取り組み始めたところであり、計画、プラン等はいまだ整備されていない。学習支援等を含めた総合的なものが必要である。
・日本子育て応援団が各都市の子育て支援の状況を、アンケートしランキングをしたところ、本市は評価が高く１０８都市中、２位であった。一方で、子どもの貧困対策については０点だった。
・生活困窮者自立支援法に基づく、学習支援教室については、２か所で行われているが、ニーズを踏まえながら、増やしていかなければならないだろう。

○　教 育 長
・以前は授業数の中での保障ということだったが、大人数の中では、十分な学習理解が得られない子どもたちもいるということで、教育課程以外の部分で、どう力を注いでいくかが考えられている。
・「ベーシック高松」という教材は、小学校で使用され、中学校については現在作成だが、「ベーシック高松」を使用して、放課後等に補習を行い、格差を埋められるよう、学校で取り組んでいる。
・放課後子ども教室では、子どもたちにどう教えられているか。

○　委　　員

・放課後児童クラブでは、勉強を教えるということはしないことになっている。子どもに宿題することを促す中で、問題のヒントを与えたり、おうちで聞いてねと声かけしたりしている。
・放課後児童クラブは約４０人の子どもを２人で見るので、学習支援はなかなか難しいところもある。
・生涯学習課の「学びの場づくり」事業を拡げ、各コミュニティを借りて、週に１回又は月２回程度、子どもたちが質問を聞きにいける環境を作れないだろうか。

○　市　　長
・「まなびの場づくり」事業はどういう事業か。

○　事 務 局
・生涯学習センターが委託元になって、各コミュニティ協議会で実施していただいている事業である。今年度は５２コミュニティセンター中、１９か所で実施され、年間で４回の事業費を持っているのみであるが、地域で拡充することも可能である。
・例えば、栗林であれば年２４回開催されている。「数学笑顔講座」という講座を、数学の苦手な中学生を対象に、元数学教師だった方を講師にして行っている。
・講座は小学生を対象にした英語講座が多い。栗林以外では、多いところでは年間１２回、少ないところでは予算額の４回の開催状況である。
・夏季休業中に講座４回を集中実施するコミュニティセンターもある。
・４月の募集時に応募していただいたコミュニティセンターに対して委託しており、予算流用を行えば、全てのコミュニティセンターが応募しても実施することは可能である。
・貧困層の方に限定した講座でなく、地域の子どもたちであれば誰もが受けられる講座である。
・地域の人材の確保が難しいという声を聞く。謝金は１回当たり５，１００円である。

○　委　　員
・地域の子どもの居場所づくりができたらいいと思う。生涯学習課の事業で通学合宿をした。子どもたちが、コミュニティセンターに宿泊し、そこから学校に通うということをしたところ、大変好評であった。地域の子どもの居場所づくりの発展形にならないだろうか。
・子ども食堂もあるが、対象が限定されており、なかなか行きづらいところがあるので、様々な子どもたちが集まれる場所が必要だと感じる。
・子どもの居場所づくりを地域で作っていくためには、各協議会の横のつながりが必要になり、相互に協力しないとできない。

○　委　　員

・地域包括ケアの対象は高齢者のみになっているが、今後は地域包括ケアの中にも、色々な年代の共生が必要になってくる。

・高齢者の定義を７５歳からにするという見直しの提言がなされたが、働く世代と高齢者の間の６５歳～７５歳の教育者ＯＢの方々と子どもを結び付けて、放課後の子どもたちの居場所づくりに働いてもらえないだろうか。

・子どもにとっても、おじいちゃん、おばあちゃん世代の方と交流を持てるのは良い。

○　市　　長

・「高齢者の居場所づくり」事業ということで、市内全域に徒歩圏内５００メートルくらいに１か所、全地域で目標３００か所を目標に進めているところである。

・高齢者の居場所と一緒に、子どもの居場所としても活用してもらうという取組をしているところもあると聞く。

・「高齢者の居場所づくり」事業の現状について教えてほしい。

○　事 務 局

・「高齢者の居場所づくり」事業は始まってから３年目であり、現在は２４０か所で行われている。今年度から子どもとの交流活動を新しく付け加えた。

・２４０か所中７１か所が子どもと一緒に交流活動をするということで、現在申請があがっている。今年度から始まったことなので、実績はまだない。

○　市　　長

・高齢者、地域の支援者がいるので、子どもたちが「高齢者の居場所づくり」事業の中に入って活動することで、子どもの状態も分かる。必要な場合は専門機関につなぐといったこともできる。

・子どもの貧困対策といっても、貧困対策だけを行うのではなく、総合的に地域全体で見守りながら、貧困対策に役立つやり方を行っていくのが重要だ。

・貧困の連鎖を断ち切るために、教育の学習支援が必要である。貧困で高校進学がままならない子どもに対して、学習支援を行い、高校進学をしてもらうというようなことだ。

○　委　　員

・おやつクラブという取組があるが、各家庭で食べきれず破棄してしまうお菓子を集めて、食べ物に困窮している子どもたちへ提供するといった方法もあるようだ。

・少しからでも、子どもたちの身体の栄養になるような方法をとっていけたらと思う。

○　市　　長

・貧困対策で子ども食堂といってしまうと、様々なところで支障がでてくる。類似団体であっても子ども食堂ではないと主張する団体もある。
・行政としては動きを把握しながらも、余計な分類はしないという対応が必要だ。

○　教 育 長
・子ども食堂も、食事を与えることが目的ではなく、子ども同士やボランティアに来ている人々とのコミュニケーション、人と人とのつながりを目的に来る人も多いのだと聞く。そのように、発展させていけたらいい。
・子どもが孤立しないように、大人と子どもをつないでいくことを地域全体で行っていかなければならない。

○　市　　長
・先ほど、各種団体、協議会の横のつながり、連携が必要だという話があったが、具体的な方法はあるか。

○　委　　員
・それぞれの団体が自分の事業に手一杯だし、他団体が何をしているのかが見えにくい。
・一緒に会議に出席すると、類似点や協力できそうな点が見えてくることもある。社会福祉協議会、子ども会、老人会がそれぞれ似たようなことをしていたりするので、相互につながれたら良い。

○　市　　長
・各コミュニティ協議会で、コミュニティだより等の広報誌を発行しているので、それを基に各団体の情報を集めて、横につなげれば、共通点が見いだせるのでは。
・あるいは、連携がうまくいっているコミュニティ協議会をモデルにして、同じようにやってみてはどうか。

○　委　　員
・全部を統括するコーディネーターのような方を決めて、事業ごとに関係のある団体に声かけをして、協力体制を整えればよいのではないだろうか。

○　事 務 局
・「地域包括ケアシステム」の構築の一つの事業になるが、介護保険の関係で要支援１、２等の認定を受けた方の支援で、高松市社会福祉協議会に委託して生活支援コーディネーターを７人配置して住民主体によるサービス提供体制を進めている。４４のコミュニティを７人で分担して、ちょっとした日常の困り事を、コミュニティ

単位で地域住民が支援できるような体制整備を進めている。

○　市　　長

・あくまで高齢者対象のコーディネーターであり、子どもは範囲内に入っていないが、居場所づくりを補完するものとして活用されているので、居場所づくりに、子どもを入れてやっていだだければよい。

○　教 育 長

・前回の総合教育会議で議論した「高松型学校・地域連携システム」では、小学校区が中心になって、学校と地域住民とがつながる仕組みができないのかということだった。

・来年度、コーディネーター役を担える方が地域にいるかどうかが重要なところだ。地域住民と学校とをつなげる方がいる学校は、即立ち上げ、希望校から始めたい。

○　市　　長

・「地域包括ケアシステム」だと、学校とのつながりが持ちづらいところがあるので、「高松型学校・地域連携システム」だと学校と地域の連携は達成されるだろう。

○　委　　員

・放課後子ども教室については、学校の空き教室や地域のコミュニティを使用している。

・最近は子どもの遊び場が少ない。スポーツや伝統文化の継承に触れるようなことをしており、地域の力を借りているので、地域コミュニティと学校をつなぐ橋渡しにならないかと考えている。

・地域も学校もとても協力的でうまくいっている。

○　市　　長

・いずれにしろ、何らかの形で子どもの居場所を作りながら、貧困対策を行っていくことが必要。

・教育支援については、地域的にも人数的にも、充実させる方向性を持つことが大切だと思うがいかがか。

・貧困対策についてはこれで終えたいと思うが、他に議論したいことはおありか。

○　委　　員

・伝統文化の継承について、地域の伝統文化がだんだん継承されなくなっていると感じる。

・教える方の高齢化が進んでおり、引き受けていただきにくいときがある。

・子どもは習い事などで忙しく、参加がなかなか難しい。

・子どもたちに、円座の「菅（すげ）円座」を伝承しようと活動している。

○　市　　長

・まず、地域の名前が「菅（すげ）円座」からきていることを子どもたちに認識してもらうことは、ふるさと学習で、非常に大事だ。
・本市のふるさと学習の事業として、郷土の偉人である菊池寛について学ぶ「寛学」、地域では鬼無小の盆栽学習、御厩焼きなど、各地域のほとんどの小学校で伝統文化の継承をとおした学習はされている。
・屋島学習は、熱心にされているようだが、予算措置はあるか。

○　教 育 長

・屋島学習は市からの助成が少しあるほか、研究成果を他に発表して助成してもらっているようだ。
・総合的な学習の時間が週２回あるので、地域に根ざしたような学習を行っている。
・地域の偉人、伝統文化について教える人が必要だが、教える人が高齢化して大変ということもある。お金もかかる。

○　委　　員

・一般の人たちが期待する伝統文化を、一堂に発表する広報の場がもう少し必要なのではないか。他地域の頑張りをみれば、自分の地域の伝統文化を広める刺激になる。
・高松は誇れる伝統文化や偉人が多く存在する。それを自覚されていない方が多いと感じる。

○　教 育 長

・子どもたちの伝統文化の学びをとおして、保護者が知るといったこともある。
・牟礼の栗山祭にいって、柴野栗山が地域に大事にされているのを見て驚いた。

○　市　　長

・学校、地域だけで終了するのではなく、市全体や複数校でお互いに発表の場を設けることで、全体の視野を広げることもできるし、活動のやりがいもできるだろう。

○　委　　員

・ミューズホールで開催された教育の日のイベントでは、子どもたちが太鼓など伝統芸能を発表していた。

○　市　　長

・本市でも、里山支援事業を行っており、地域の里山の清掃活動や遊歩道を整備するのに予算をつけているが、そこに子どもたちも入って活動してもらっている例も多い。活動をとおして、地理的な特徴や地域の歴史や伝統、地名の由来を知ることは重要だ。
・学びをとおして、ふるさとへの愛着、市に対するプライドを持つことにつながる。
・各学校でどういったふるさと活動をしているか、教育委員会で把握し、奨励しているか。

○　事 務 局
・総合的な学習については、総合的な学習推進事業のなかで、学校に助成しており、学校の取組の報告があがっている。
・地域の自然や歴史に関連した、ふるさと学習につながる活動が多く報告されている。

○　教 育 長
・学校のふるさと学習を本市の他課でやっている事業とどう連携、活用していくか考えていかなければならない。

○　市　　長
・屋島小学校が作成した「屋島賛歌」が、色々な機会に披露されているのをよく耳にする。
・庵治の獅子舞が、全国大会の余興で披露されているのも目にすることがある。

○　委　　員
・放課後子ども教室では、今年度から茶道に取り組んでいる。費用面で、単独で行うことが難しかったので、「伝統文化親子教室」という国の事業を文化芸術振興課から案内していただき、申請をした。全国の取組を見ると、地域の獅子舞も含まれていたので、ふるさと学習に活用してもいいかもしれない。地域にお知らせしていくことも必要だ。

○　市　　長
・総合センターで「コミュニティ助成事業」があるが、伝統文化の保存事業には使用できるのか。

○　事 務 局
・青少年の育成事業だったと思うが、文化的な活動の助成があったように思う。
・コミュニティ協議会を対象にした助成になるが、「ゆめづくり推進事業」を本市地域振興課、コミュニティ推進課が募集し、行っている。歴史や文化等、各地区の個

性を掘り起こす事業も各地区で取り組まれている。来年度、各地区に４年計画くらいで継続できる事業を行えるよう見直しを行った。

○　委　　員

・文化的な要素で、地域自慢みたいなものができれば、結果的に地域の居場所づくりの活性化にもつながるだろう。

○　市　　長

・地域の伝統文化としては、川東小学校で「農村歌舞伎」の子ども歌舞伎が、小学５年生を対象に取り組まれている。モデル的ないい例である。
・学校が主体になってやっているところと、地域が主体となってやっているところと若干違うが、発表の場を設けることで、活性化する。
・地域の伝統文化の継承の他に、議論したいことはおありか。

○　教 育 長

・子どもの自己肯定感については、教育委員会でも考えていかなければならないことだが、市長はどうお考えか。

○　事 務 局

・本市の子どもの自己肯定感において調査結果をお伝えしたい。
・小学校と中学校で分かれており、「自分には良いところがありますか」という質問に対して、回答が４つに分かれている。上２つの良いほうの回答は、小学校は昨年度よりもやや増加し、ほぼ全国平均になってきているが、少し低い。中学校は昨年度とほぼ変わらず、全国平均よりかなり低い状況。
・一番上の「あてはまる」と回答した生徒が本市は少ないのが特徴。小学校は全国と比べると約１．５％低く、県全体よりは少し高い。中学校は全国と比べると約４．５％低い状況で、中学校になればなるほど低くなる傾向がある。
・県全体として、全国平均より低い状況。

○　市　　長

・自分に自信がない生徒が多いというか、引っ込み思案な子が多い印象を持っている。県民性もあるかもしれない。
・周りと同じでないといけないという先入観があるのだろうか。
・欧米では違いを尊重するので、自己肯定感の高まりにつながっているのだろうか。

○　教 育 長

・世界的な調査を見ても、日本の子どもたちは自分に自信がない子が多い。
・周りの子との比較を過剰に気にするところがある。以前の自分との比較の中で、自

分の成長を測り、喜べばいいのだが。

○　委　　員

・高松第一学園に行ったときに、中高一貫の異学年交流が成果をだしているということを聞いた。

○　市　　長

・少子化で兄弟や親戚が少なくなっていることで、他者とコミュニケーションが少なくなる。また協調性を重んじるばかり、個性を出さないことが見受けられ、自分に自信がない子が多くなっている印象だ。

・第一学園のように、運動会を小・中一緒にすることで、上の子が下の子の面倒を見ることをとおして、学校で幅広く他者との交流、役割を持つことが、自己肯定感につながっているのでは。

・コミュニケーション能力を発達させる教育が必要だと感じる。

○　委　　員

・学校でも発表をする子をよしとするような雰囲気作りが必要だと思う。

・ＳＮＳでも匿名性が問題になっているが、匿名だと何でも言えるが、自分の名前を出してだと言えないといったことが見受けられる。

・自分の名前を堂々と言って話す教育が大切だと感じる。

○　市　　長

・違いを認める、違っていて当たり前だという雰囲気作りが必要。

・間違いを正すのではなく、みんなで肯定してあげる、いいところを褒める、といった褒める教育をもっとやるべきではないか。

・他者とのコミュニケーションを学ぶ、実践する場が大切だ。

○　委　　員

・学校訪問に行ったとき、中央小学校の取組がいいと感じた。児童が、自分の言葉で話し、意見をつないでいく、また子ども同士の意見の違いを肯定し説明する、ということをしていた。学校現場でどんどん取り入れてほしい。

○　市　　長

・今までは知識偏重教育だったので、自分の生き方を教える、考えるといったことはあまりなかったように思う。

・最近、アクティブ・ラーニングという言葉をよく聞く。子どもの生きる力の育成につながるのだろうか。

○　教 育 長

・アクティブ・ラーニングは自分の考え方を積極的に述べ、他者との意見の違いを見出し考える、能動的な学習のことである。享受型の授業でなく、生徒同士が討論し合うもので、机等の配列も対面型に変え、教師の役割がいかに子どもたちに積極的にディスカッションさせるかといったファシリテーター的なものになる。

・知識・技能が必要なので、享受する授業も必要である。また、議論する力量のない子どもたちもいるので、そことのバランスをどうとるかといったことも重要。

・アクティブ・ラーニングは、次の学習指導要領の観点の一つ。

・知識だけならコンピュータで学べるのだから、学校教育自身の役割が、学校でディスカッションして、何かを得るというものでなければならない。

○　市　　長

・これだけ国際社会が進み、またＡＩ（人工知能）が今後進んでくると、知識だけでは難しい時代になり、積極性がないと世間では生きていけないだろう。

・コミュニケーションがとれない子どもが増えてきている気がする。

○　教 育 長

・テレビでも字幕が流れるので、耳から入ってくる声に鈍化しており、感情が読み取れないといった子がいるように思う。

○　市　　長

・パワーポイントの講義でも、映像をみて、理解したような気になっているが、聞いていないところがあるから分かっていないといったこともある。

・やはり自己肯定感をより高めるためには、アクティブ・ラーニングを充実させ、積極性を引き出し、自分の意見を述べさせることが重要だ。

・子どもの自己肯定感の他に、議論したいことはおありか。

○　教 育 長

・教育委員になられて、教育についてどうお思いか。

○　委　　員

・今まで培ってきた知識と全く違うことに触れている。教育現場を見て思うことは、教職員の方々は、すごく努力している。不祥事が起こると大きく報道されるので、大変な世界だと感じる。

・将来、学校の先生になりたいという子をもっと増やしていかなければならないと思う。

○　市　　長

・色々な報道がなされるが、教育において必要なのは、常にオープンにしておくことだろう。それが子どもを守ることにもつながる。

○　教 育 長

・幸いなことに、子どもの夢に関する民間の調査によると、それなりの位置に教員がいることを嬉しく思う。

○　市　　長

・学校訪問をしているが、最近思った以上に、学校が落ち着いていると思う。
・不登校の問題や虐待は大きな問題だと感じている。

○　教 育 長

・虐待は増えていると感じる。小学校低学年の子は虐待を隠し、親をかばう、けなげさがある。地域や学校で見逃さないようにしなければならない。

○　市　　長

・児童相談所を中心に、学校や教育委員会、子ども未来部など関係機関とのネットワークづくりはできているのか。

○　教 育 長

・県や市や関係機関に適切に動いていただいている。学校や保護者だけではトラブルになるところに、市や関係機関が入るところでまとまることがある。

○　委　　員

・地域でお世話する人や地域のネットワークが増えていけばいい。
・キーマンとなるような人材、学校とも協力できるような人材を、各地域で育成すればよいと感じる。

○　市　　長

・コミュニティスクール化について、教育委員会として推進してく方向性だと思うが教員の多忙化が問題になるのだろうか。

○　教 育 長

・コミュニティスクール化については、本教育委員会で推進していきたい。教員の多忙化が問題になるが、他県の報告例では、導入して軌道にのれば、教職員の負担も減ったという声もある。地域が、補完的な面を見てくれれば負担減につながる。

○　委　　員

・教育委員になり、違う立場から見ると、保護者の考え方、生活のスタイルが大きく変わり、学校の先生との意思疎通が難しくなってきたと感じることがある。

・学校の先生の勤務環境がすごく厳しいと思う。地域の力が入ることによって、先生の勤務環境が少しでも楽になるとか、学校への理解を深めて、協力できるような体制作りができればいいと感じる。

○　教 育 長

・教育委員さんには新鮮な立場で意見をいただき、大変有り難く思っている。

・今後は個別の学校の課題についても教育委員会で議論し、市長とも議論を進めていきたい。

○　市　　長

・子どもたちの貧困対策については、子どもの居場所づくりと同時に、貧困対策もこれまで以上に力をいれていかなければならないと感じた。教育支援を充実しながら、地域の中で子どもたちが居場所を持てるように、高齢者の「地域包括ケアシステム」との関連性を持たせながら、子どもたちを健全に育成していく必要性を感じたところである。

・伝統文化の継承については、ふるさとの歴史、伝統文化、偉人を子どもたちに知ってもらい、シビック・プライド、自分自身のアイデンティティを確立していく必要性がある。地域、学校をうまく結び付け、次世代に継承していくことが必要である。

・貧困対策も伝統文化の継承も、学校と地域コミュニティの連携、市長部局と教育委員会の連携が必要になるので、より連携を強固にしていかなければならない。

・子どもの自己肯定感を高めることは、特にこれからの情報化時代について、生きる力をもって活躍できる人材を育成するために必要なことである。他者とのコミュニケーション能力をより高めていくことが求められる。

・これらの課題について、教育委員会でも積極的に取り組んでいただきたいし、垣根を越えて市長部局とも連携しながら行っていく必要性があるように感じる。